

令和元年8月28日現在

機関番号：23601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K15890

研究課題名（和文）矯正施設で高齢受刑者に携わる看護師が抱える困難感の解明と対処方略の検討

研究課題名（英文）Difficulties faced by nurses engaged in care for elderly prisoners in a correctional facility, and measures to deal with difficulties

研究代表者

有賀 智也（ARUGA, TOMOYA）

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号：10708069

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：矯正施設で高齢者に携わる看護師として、医療観察法病棟で職務に従事する看護師に焦点を当てた。そして高齢者への看護実践とその困難を明らかにすることを目的とし研究を実施した。看護実践の一部として、高齢者の生活歴等の情報を収集し身体や認知機能をアセスメントしていた。その上で起こり得るリスクを予見し援助を実施していた。困難の一部として、看護師は長期間精神科で働いていたため、整形外科等の他診療科の知識や経験不足を感じていた。これらを明らかにする事が出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今回の研究で、医療観察法病棟で職務に従事する看護師の高齢対象者への看護実践とその困難を明らかにする事が出来た。また、医療観察法で高齢者看護に従事する看護師の存在を社会に伝える事が出来た。看護師は、罪を犯した人間に対しても分け隔てなく看護を実践していた。同時に困難も抱いていた。今回の研究に取り組んだことにより、困難を抱く看護師へのケアを検討する必要性へ繋がったと考えられる。さらに医療観察法病棟における高齢者への看護の一助となったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on nurses engaged in duties in wards under the Medical Treatment and Supervision Act, as nurses engaged in nursing of elderly prisoners in a correctional facility, to understand the nursing of the elderly patients and the difficulties involved in the duties. For the nursing activities, findings showed that nurses collected information about the elderly patients, such as the life history, and assessed the physical and cognitive functions. Based on this information, nurses estimated possible risks and assisted the patients. Among the difficulties, nurses felt a lack of knowledge and experience of other clinical departments such as orthopedics because these nurses have spent long periods working in psychiatric wards.

研究分野：老年看護学分野

キーワード：医療観察法病棟 看護師 高齢対象者 看護実践 困難

1. 研究開始当初の背景

(1) 矯正施設とは刑事事件等、裁判の執行を受ける者を収容し、その人権を保護しつつ適切な処遇を行うことを目的とする施設である。その矯正施設内の高齢者に関する先行研究は福祉学分野に多く見られる。社会復帰への課題を提示や(古川:2010)、高齢受刑者が社会に出る時の受け入れ先の確保の難しさや社会の中に定着することの困難さについて述べている(栗屋:2013)。これらの先行研究は、いずれも高齢受刑者に着目したものである。また高齢化に伴い高齢者の犯罪件数の増加や受刑者の高齢化の問題が顕在化(法務省:平成25年度版犯罪白書)してきている。しかし、看護学分野において矯正施設に関する研究は散見される程度であり、看護師自身に焦点を当てた研究はない。看護師は、その職務の特性から多くのストレスを抱えている事は周知されている。更に、矯正施設という特殊な環境下で就労することは、想像すらできないような特有な心理状態に陥っている可能性がある。したがって、矯正施設内での看護に従事する看護師もストレスを抱えていると想像することは難くない。よって、矯正施設内の高齢受刑者の看護のあり方を探るために、看護師がどのような事に苦慮しているかを知る必要がある。それを知ることが出来れば、看護師の心のケアを行う最も適した方法を探究することができ、看護師の精神衛生の改善が期待できる。また、長いスパンで一考した場合、高齢受刑者が心身ともに落ち着いた状態で矯正施設内での生活を送ることができるようになれば、再入所防止や再犯防止に役立つ可能性がある。ひいては、高齢受刑者の人生をより良いものとする可能性も有り得る。つまり、今回の研究を実施することにより、矯正施設内看護師および高齢受刑者に対し、大きな成果が期待できる。

<参考文献>

古川隆司、語りを通じた高齢犯罪者の社会復帰への軌跡と課題、老年社会学 32(2)、2010、162
栗屋友恵、社会から忘れられた高齢犯罪者 刑務所における認知症受刑者の釈放時保護事例、認知症ケア事例ジャーナル 6(2)、2013、146-153
法務省:平成25年度版犯罪白書第4編第4章第1節。
http://hakusyo1.moj.go.jp/jp/60/nfm/n_60_2_4_4_1_0.html

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「矯正施設で高齢受刑者に携わる看護師が抱える困難感の解明と対処方略の検討」を導き出すことである。よって本研究は、以下のことを目的とする。

高齢受刑者を看護するうえで求められる看護師の能力を知る。

高齢受刑者を看護することで抱える困難感を解明する。

3. 研究の方法

(1) 今回の研究では矯正施設として、厚生労働省のホームページに掲載されている心神喪失者等医療観察法の医療機関等(以下、医療観察法病棟)を対象とした。医療観察法は精神科医療のひとつとして位置付けられ、重大な他害行為を行った者に対し適切な医療を提供し、社会復帰を促進することを目的とした制度である。その病棟において、研究協力依頼に同意が得られた2つの病院を選定した。その中で、65歳以上の高齢対象者への看護経験がある10名の看護師を対象とした。看護師に対し、インタビューガイドを用い個別に半構成面接を行った。インタビューガイドは、看護師の属性、高齢対象者の概要、高齢対象者の入院経過、高齢対象者への具体的な実践内容、実践の中で困難と感じたことにより構成された。さらに、事例に沿い実践場面を挙げつつ出来るだけ詳しくかつ自由に語ってもらった。インタビュー内容をもとに逐語録を作成し、看護師が高齢対象者へ行った具体的な実践、その実践の中で難しさを感じた内容を、それぞれ1コードとして抽出した。そして内容を分析、統合し、サブカテゴリ、カテゴリ化した。

4. 研究成果

(1) 今回の研究により、医療観察法病棟における高齢対象者への看護実践と看護師が抱える困難を抽出することができた。元来、看護学分野において矯正施設に関する研究が少ない中で、医

療観察法病棟という特殊性の強い病棟における看護実践と困難を抽出することができたことは、本研究の成果である。また今回抽出された看護実践は、多様性に富む高齢者の発達課題に即したものでなく、医療観察法病棟ならではの特徴的なものも見受けられた。これも、今回の研究での成果であると言えよう。今後の課題としては、看護師が抱く困難の更なる軽減に向けて、医療観察法病棟をはじめとするサンプル収集を全国へ広げ、対処方略の検討を重ねていく必要がある。研究成果の詳細は、以下に述べる。

看護師の性別は男性5名、女性5名であった。年齢は34歳～59歳であり平均年齢は46.7±7.9歳であった。高齢対象者への看護経験年数は0.3年～10年であり、平均年数は5.1±4.7年であった。分析の結果から、医療観察法病棟での高齢対象者への看護実践として360コードから、22サブカテゴリ、7カテゴリが抽出された。抽出された7カテゴリは【属性、疾患、機能、生活補助具に関する情報を得る】、【高齢者に起こり得るリスクを予見し関わる】、【残存能力を活かし出来る事は促し、出来るか否かを見守り、出来ない事のみ介助を行う】、【敬いつつ高齢者の輝かしい記憶に働きかけ会話を重ね、関係を築く】、【高齢者の身に付けた見聞、保有する能力を強みとして活かす】、【高齢者の理解力と体力に合わせた教育を行う】、【退院後の生活を見据える】であった。また困難においては、111コードから、8サブカテゴリ、4カテゴリが抽出された。抽出された4カテゴリは【高齢者の新たな記憶と理解の難しさ】、【医療観察法の理念と高齢者への医療目標との狭間の葛藤】、【生き様と共に作られてきた習慣変革の難しさ】、【全身管理の知識と経験不足によるリスク管理の不十分さ】であった。

看護実践として、看護師は看護実践のもととなる高齢者の疾患から生活史に至る幅広い情報などを捉え、その上で残存能力を活かし生活を支えるといった健やか生活するための看護、身に付けた見分を活かすといった尊厳を重んじた看護など、高齢者の発達課題に即した看護を実践していた。それらと共に、識字能力の把握、個人の能力に合わせた教育、スムーズな退院の実現と地域での社会生活の営みの支援といった医療観察法病棟に特徴的な看護も同時に実践していた。看護師は、多様性に富む高齢者の発達課題に即した看護を実践するだけでなく、社会復帰を促進する事を目的とした、医療観察法病棟の看護をも実践していた。医療観察法病棟の看護師には、高齢者全般に対する看護と、医療観察法病棟特有の看護を同時に実践する能力が求められると考えられる。

困難として、看護師には新しい物事について記憶し理解を促すことの難しさ、医療観察法の教育よりも生活の維持を優先しなければならない葛藤、内省を深めることや身体機能の変化に関する想像と現実の乖離を埋める難しさが生じていた。それに伴い、高齢者への教育に長い時間を費やす必要性が生じ、看護師が難しさを感じていたと考えられる。また、精神科病棟の経験が長いことによる全身管理を行う知識と経験の少なさも、看護師が感じる難しさのひとつになっていた。

看護師は医療観察法病棟の責務を全うする中で、看護実践で生じる困難を感じていた。医療観察法病棟では、多職種チーム（Multi-disciplinary team；MDT）を基本とし、それぞれの職種が専門的な視点からアセスメントし治療プログラムを運営している。多職種の特色を活かした職種の垣根を超えた感情の共有、定期的な情報交換の場の確保とさらなる情報の共有、高齢者がより親しみやすいプログラムの提供などが看護師の困難感を軽減するためには重要であると考えられる。したがって、これらの多職種チームの特色を活かし、看護師が抱く困難を軽減させる取り組みが必須である。看護師が抱く困難を軽減することにより、医療観察法病棟における看護師のやりがいにも繋がる。ひいては医療観察法病棟の責務を達成するための看護実践の支えになると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計2件)

有賀 智也、病棟看護師が医療観察下にある高齢対象者に行っている対応とその困難、日本看護福祉学会、2017

有賀 智也、病棟看護師が医療観察下にある高齢対象者に行っている対応とその困難(第2報)、日本看護福祉学会、2018

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：渡辺 みどり

ローマ字氏名：WATANABE Midori

所属研究機関名：長野県看護大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 60293479

(2) 研究分担者

研究分担者氏名：千葉 真弓

ローマ字氏名：CHIBA Mayumi

所属研究機関名：長野県看護大学

部局名：看護学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 20336621